

試験開始の指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

Ⓨ

数 学 ①〔数学Ⅰ〕 (100点) (70分)

I 注 意 事 項

- 1 解答用紙に、正しく記入・マークされていない場合は、採点できないことがあります。特に、解答用紙の解答科目欄にマークされていない場合又は複数の科目にマークされている場合は、0点となります。
- 2 出題科目、ページ及び選択方法は、下表のとおりです。

出 題 科 目	ペ ー ジ	選 択 方 法
数 学 Ⅰ	4～28	左の2科目のうちから1科目を選択し、 解答しなさい。
数学Ⅰ・数学A	29～59	

- 3 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。
- 4 選択問題については、いずれか2問を選択し、その問題番号の解答欄に解答しなさい。
- 5 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 6 不正行為について
 - ① 不正行為に対しては厳正に対処します。
 - ② 不正行為に見えるような行為が見受けられた場合は、監督者がカードを用いて注意します。
 - ③ 不正行為を行った場合は、その時点で受験を取りやめさせ退室させます。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

II 解答上の注意

解答上の注意は、裏表紙に記載してあります。この問題冊子を裏返して必ず読みなさい。

II 解答上の注意

- 1 解答は、解答用紙の問題番号に対応した解答欄にマークしなさい。
- 2 問題の文中の **ア**， **イウ** などには、符号(−, ±)又は数字(0～9)が入ります。ア、イ、ウ、…の一つ一つは、これらのいずれか一つに対応します。それらを解答用紙のア、イ、ウ、…で示された解答欄にマークして答えなさい。

例 **アイウ** に −83 と答えたいとき

ア	●	±	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
イ	⊖	±	0	1	2	3	4	5	6	7	●	9
ウ	⊖	±	0	1	2	●	4	5	6	7	8	9

- 3 分数形で解答する場合、分数の符号は分子につけ、分母につけてはいけません。

例えば、 $\frac{\text{エオ}}{\text{カ}}$ に $-\frac{4}{5}$ と答えたいときは、 $\frac{-4}{5}$ として答えなさい。

また、それ以上約分できない形で答えなさい。

例えば、 $\frac{3}{4}$ と答えるところを、 $\frac{6}{8}$ のように答えてはいけません。

- 4 小数の形で解答する場合、指定された桁数の一つ下の桁を四捨五入して答えなさい。また、必要に応じて、指定された桁まで **0** にマークしなさい。

例えば、**キ** . **クケ** に 2.5 と答えたいときは、2.50 として答えなさい。

- 5 根号を含む形で解答する場合、根号の中に現れる自然数が最小となる形で答えなさい。

例えば、**コ** $\sqrt{\text{サ}}$ に $4\sqrt{2}$ と答えるところを、 $2\sqrt{8}$ のように答えてはいけません。

- 6 根号を含む分数形で解答する場合、例えば $\frac{\text{シ} + \text{ス} \sqrt{\text{セ}}}{\text{ソ}}$ に

$\frac{3 + 2\sqrt{2}}{2}$ と答えるところを、 $\frac{6 + 4\sqrt{2}}{4}$ や $\frac{6 + 2\sqrt{8}}{4}$ のように答えてはいけません。

- 7 問題の文中の二重四角で表記された **タ** などには、選択肢から一つを選んで、答えなさい。

- 8 同一の問題文中に **チツ**， **テ** などが2度以上現れる場合、原則として、2度目以降は、**チツ**， **テ** のように細字で表記します。

数 学 I

(全問必答)

第1問 (配点 20)

〔1〕 c を正の整数とする。 x の2次方程式

$$2x^2 + (4c - 3)x + 2c^2 - c - 11 = 0 \quad \dots\dots\dots \textcircled{1}$$

について考える。

(1) $c = 1$ のとき、 $\textcircled{1}$ の左辺を因数分解すると

$$\left(\boxed{\text{ア}}x + \boxed{\text{イ}} \right) \left(x - \boxed{\text{ウ}} \right)$$

であるから、 $\textcircled{1}$ の解は

$$x = -\frac{\boxed{\text{イ}}}{\boxed{\text{ア}}}, \quad \boxed{\text{ウ}}$$

である。

(2) $c = 2$ のとき、 $\textcircled{1}$ の解は

$$x = \frac{-\boxed{\text{エ}} \pm \sqrt{\boxed{\text{オカ}}}}{\boxed{\text{キ}}}$$

であり、大きい方の解を α とすると

$$\frac{5}{\alpha} = \frac{\boxed{\text{ク}} + \sqrt{\boxed{\text{ケコ}}}}{\boxed{\text{サ}}}$$

である。また、 $m < \frac{5}{\alpha} < m + 1$ を満たす整数 m は $\boxed{\text{シ}}$ である。

(数学 I 第1問は次ページに続く。)

- (3) 太郎さんと花子さんは、①の解について考察している。

太郎：①の解は c の値によって、ともに有理数である場合もあれば、ともに無理数である場合もあるね。 c がどのような値のときに、解は有理数になるのかな。

花子：2次方程式の解の公式の根号の中に着目すればいいんじゃないかな。

①の解が異なる二つの有理数であるような正の整数 c の個数は

個である。

(数学 I 第 1 問は次ページに続く。)

数学 I

〔2〕 U を全体集合とし、 A, B, C を U の部分集合とする。また、 A, B, C は

$$C = (A \cup B) \cap \overline{(A \cap B)}$$

を満たすとする。ただし、 U の部分集合 X に対し、 \overline{X} は X の補集合を表す。

(1) U, A, B の関係を図 1 のように表すと、 $A \cap \overline{B}$ は図 2 の斜線部分である。

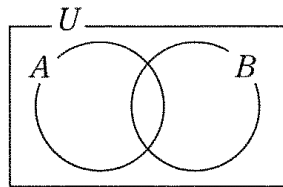


図 1

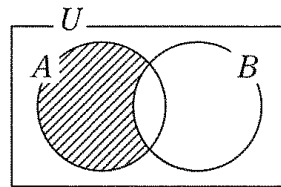
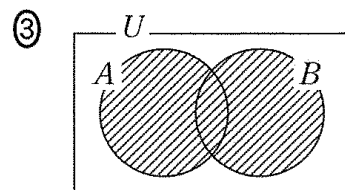
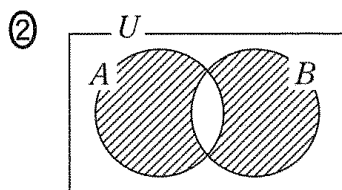
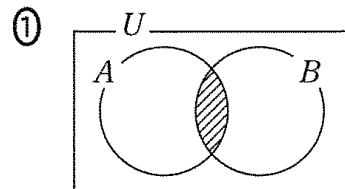
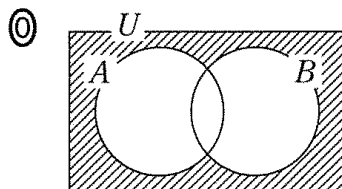


図 2

このとき、 C は の斜線部分である。

については、最も適当なものを、次の①~③のうちから一つ選べ。



(数学 I 第 1 問は次ページに続く。)

(2) 集合 U, A, C が

$$U = \{x \mid x \text{ は } 15 \text{ 以下の正の整数}\}$$

$$A = \{x \mid x \text{ は } 15 \text{ 以下の正の整数で } 3 \text{ の倍数}\}$$

$$C = \{2, 3, 5, 7, 9, 11, 13, 15\}$$

であるとする。 $A \cap B = A \cap \overline{C}$ であることに注意すると

$$A \cap B = \{ \boxed{\text{ソ}}, \boxed{\text{タチ}} \}$$

であることがわかる。また、 B の要素は全部で $\boxed{\text{ツ}}$ 個あり、そのうち最大のもの $\boxed{\text{テト}}$ である。

さらに、 U の要素 x について、条件 p, q を次のように定める。

$$p : x \text{ は } \overline{A \cap B} \text{ の要素である}$$

$$q : x \text{ は } 5 \text{ 以上かつ } 15 \text{ 以下の素数である}$$

このとき、 p は q であるための $\boxed{\text{ナ}}$ 。

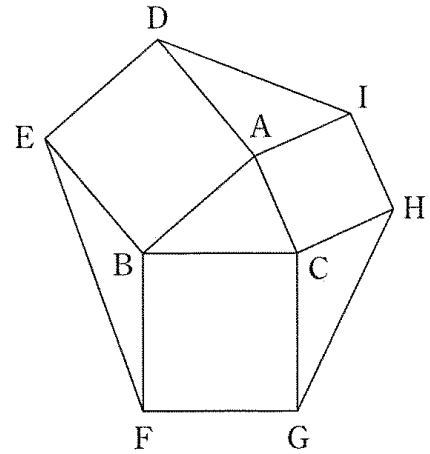
$\boxed{\text{ナ}}$ の解答群

- ① 必要条件であるが、十分条件ではない
- ② 十分条件であるが、必要条件ではない
- ③ 必要十分条件である
- ④ 必要条件でも十分条件でもない

数学 I

第 2 問 (配点 30)

右の図のように、 $\triangle ABC$ の外側に辺 AB , BC , CA をそれぞれ 1 辺とする正方形 $ADEB$, $BFGC$, $CHIA$ をかき、2 点 E と F , G と H , I と D をそれぞれ線分で結んだ図形を考える。以下において



参考図

$$BC = a, CA = b, AB = c$$

$$\angle CAB = A, \angle ABC = B, \angle BCA = C$$

とする。

(1) $b = 6, c = 5, \cos A = \frac{3}{5}$ のとき, $\sin A = \frac{\boxed{\text{ア}}}{\boxed{\text{イ}}}$ であり, $\triangle ABC$ の

面積は $\boxed{\text{ウエ}}$, $\triangle AID$ の面積は $\boxed{\text{オカ}}$ である。また, 正方形 $BFGC$ の面積は $\boxed{\text{キク}}$ である。

(数学 I 第 2 問は次ページに続く。)

(2) 正方形 BFGC, CHIA, ADEB の面積をそれぞれ S_1, S_2, S_3 とする。このとき, $S_1 - S_2 - S_3$ は

- $0^\circ < A < 90^\circ$ のとき, 。
- $A = 90^\circ$ のとき, 。
- $90^\circ < A < 180^\circ$ のとき, 。

~ の解答群 (同じものを繰り返し選んでもよい。)

- ① 0 である
- ② 正の値である
- ③ 負の値である
- ④ 正の値も負の値もとる

(3) $\triangle AID, \triangle BEF, \triangle CGH$ の面積をそれぞれ T_1, T_2, T_3 とする。このとき, である。

の解答群

- ① $a < b < c$ ならば, $T_1 > T_2 > T_3$
- ② $a < b < c$ ならば, $T_1 < T_2 < T_3$
- ③ A が鈍角ならば, $T_1 < T_2$ かつ $T_1 < T_3$
- ④ a, b, c の値に関係なく, $T_1 = T_2 = T_3$

(数学 I 第 2 問は次ページに続く。)

数学 I

- (4) どのような $\triangle ABC$ に対しても、六角形 DEFGHI の面積は b, c, A を用いて

$$2 \left\{ b^2 + c^2 + bc \left(\boxed{\text{ス}} \right) \right\}$$

と表せる。

$\boxed{\text{ス}}$ の解答群

- | | | |
|-----------------------|-----------------------|-----------------------|
| ① $\sin A + \cos A$ | ② $\sin A - \cos A$ | ③ $2 \sin A + \cos A$ |
| ④ $2 \sin A - \cos A$ | ⑤ $\sin A + 2 \cos A$ | ⑥ $\sin A - 2 \cos A$ |

(数学 I 第 2 問は次ページに続く。)

(5) $\triangle ABC$, $\triangle AID$, $\triangle BEF$, $\triangle CGH$ のうち、外接円の半径が最も小さいものを求める。

$0^\circ < A < 90^\circ$ のとき、ID BC であり

($\triangle AID$ の外接円の半径) ($\triangle ABC$ の外接円の半径)

であるから、外接円の半径が最も小さい三角形は

• $0^\circ < A < B < C < 90^\circ$ のとき、 である。

• $0^\circ < A < B < 90^\circ < C$ のとき、 である。

, の解答群(同じものを繰り返し選んでもよい。)

< = >

, の解答群(同じものを繰り返し選んでもよい。)

$\triangle ABC$ $\triangle AID$ $\triangle BEF$ $\triangle CGH$

(6) $\triangle ABC$, $\triangle AID$, $\triangle BEF$, $\triangle CGH$ のうち、内接円の半径が最も大きい三角形は

• $0^\circ < A < B < C < 90^\circ$ のとき、 である。

• $0^\circ < A < B < 90^\circ < C$ のとき、 である。

, の解答群(同じものを繰り返し選んでもよい。)

$\triangle ABC$ $\triangle AID$ $\triangle BEF$ $\triangle CGH$

数学 I

第 3 問 (配点 30)

〔1〕 k を実数とする。2 次関数

$$y = 2x^2 - 4x + 5$$

のグラフを G とする。また、グラフ G を y 軸方向に k だけ平行移動したグラフを H とする。

(1) グラフ G の頂点の座標は $(\boxed{\text{ア}}, \boxed{\text{イ}})$ である。

(2) グラフ H が x 軸と共有点をもたないような k の値の範囲は

$$k > \boxed{\text{ウエ}}$$

である。

(3) $k = -5$ のとき、グラフ H を x 軸方向に 1 だけ平行移動したものは、 $2 \leq x \leq 6$ の範囲で x 軸と $\boxed{\text{オ}}$ 点で交わる。また、 $k = -5$ のとき、グラフ H を x 軸方向に 3 だけ平行移動したものは、 $2 \leq x \leq 6$ の範囲で x 軸と $\boxed{\text{カ}}$ 点で交わる。

(数学 I 第 3 問は次ページに続く。)

(4) グラフ H が x 軸と異なる 2 点で交わる時、その 2 点の間の距離は

$$\sqrt{\boxed{\text{キク}} \left(k + \boxed{\text{ケ}} \right)}$$

である。

したがって、グラフ H を x 軸方向に平行移動して、 $2 \leq x \leq 6$ の範囲で x 軸と異なる 2 点で交わるようにできる時、 k のとり得る値の範囲は

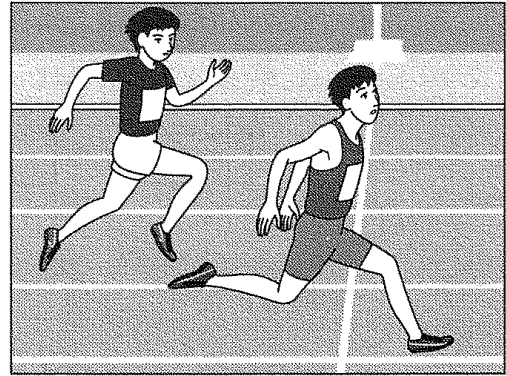
$$\boxed{\text{コサシ}} \leq k < \boxed{\text{スセ}}$$

である。

(数学 I 第 3 問は次ページに続く。)

数学 I

〔2〕 陸上競技の短距離 100 m 走では、100 m を走るのにかかる時間(以下、タイムと呼ぶ)は、1 歩あたりの進む距離(以下、ストライドと呼ぶ)と 1 秒あたりの歩数(以下、ピッチと呼ぶ)に関係がある。ストライドとピッチはそれぞれ以下の式で与えられる。



$$\text{ストライド (m/歩)} = \frac{100 \text{ (m)}}{100 \text{ m を走るのにかかった歩数 (歩)}}$$

$$\text{ピッチ (歩/秒)} = \frac{100 \text{ m を走るのにかかった歩数 (歩)}}{\text{タイム (秒)}}$$

ただし、100 m を走るのにかかった歩数は、最後の 1 歩がゴールラインをまたぐこともあるので、小数で表される。以下、単位は必要のない限り省略する。

例えば、タイムが 10.81 で、そのときの歩数が 48.5 であったとき、ストライドは $\frac{100}{48.5}$ より約 2.06、ピッチは $\frac{48.5}{10.81}$ より約 4.49 である。

なお、小数の形で解答する場合は、**解答上の注意**にあるように、指定された桁数の一つ下の桁を四捨五入して答えよ。また、必要に応じて、指定された桁まで○にマークせよ。

(数学 I 第 3 問は次ページに続く。)

数学 I

- (1) ストライドを x 、ピッチを z とおく。ピッチは 1 秒あたりの歩数、ストライドは 1 歩あたりの進む距離なので、1 秒あたりの進む距離すなわち平均速度は、 x と z を用いて ソ (m/秒) と表される。

これより、タイムと、ストライド、ピッチとの関係は

$$\text{タイム} = \frac{100}{\text{ソ}} \quad \dots\dots\dots \text{①}$$

と表されるので、ソ が最大になるときにタイムが最もよくなる。ただし、タイムがよくなるとは、タイムの値が小さくなることである。

ソ の解答群

- | | | |
|---------------------|---------------------|------------------|
| ① $x + z$ | ② $z - x$ | ③ xz |
| ④ $\frac{x + z}{2}$ | ⑤ $\frac{z - x}{2}$ | ⑥ $\frac{xz}{2}$ |

(数学 I 第 3 問は次ページに続く。)

数学 I

(2) 男子短距離 100 m 走の選手である太郎さんは、①に着目して、タイムが最もよくなるストライドとピッチを考えることにした。

次の表は、太郎さんが練習で 100 m を 3 回走ったときのストライドとピッチのデータである。

	1 回目	2 回目	3 回目
ストライド	2.05	2.10	2.15
ピッチ	4.70	4.60	4.50

また、ストライドとピッチにはそれぞれ限界がある。太郎さんの場合、ストライドの最大値は 2.40、ピッチの最大値は 4.80 である。

太郎さんは、上の表から、ストライドが 0.05 大きくなるとピッチが 0.1 小さくなるという関係があると考えて、ピッチがストライドの 1 次関数として表されると仮定した。このとき、ピッチ z はストライド x を用いて

$$z = \boxed{\text{タチ}}x + \frac{\boxed{\text{ツテ}}}{5} \dots\dots\dots \text{②}$$

と表される。

②が太郎さんのストライドの最大値 2.40 とピッチの最大値 4.80 まで成り立つと仮定すると、 x の値の範囲は次のようになる。

$$\boxed{\text{ト}}.\boxed{\text{ナニ}} \leq x \leq 2.40$$

(数学 I 第 3 問は次ページに続く。)

数学 I

$y = \boxed{\text{ソ}}$ とおく。②を $y = \boxed{\text{ソ}}$ に代入することにより、 y を x の関数として表すことができる。太郎さんのタイムが最もよくなるストライドとピッチを求めるためには、 $\boxed{\text{ト}} . \boxed{\text{ナニ}} \leq x \leq 2.40$ の範囲で y の値を最大にする x の値を見つければよい。このとき、 y の値が最大になるのは $x = \boxed{\text{ヌ}} . \boxed{\text{ネノ}}$ のときである。

よって、太郎さんのタイムが最もよくなるのは、ストライドが $\boxed{\text{ヌ}} . \boxed{\text{ネノ}}$ のときであり、このとき、ピッチは $\boxed{\text{ハ}} . \boxed{\text{ヒフ}}$ である。また、このときの太郎さんのタイムは、①により $\boxed{\text{ヘ}}$ である。

$\boxed{\text{ヘ}}$ については、最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 9.68	② 9.97	③ 10.09
④ 10.33	⑤ 10.42	⑥ 10.55

数学 I

第 4 問 (配点 20)

就業者の従事する産業は、勤務する事業所の主な経済活動の種類によって、第 1 次産業(農業、林業と漁業)、第 2 次産業(鉱業、建設業と製造業)、第 3 次産業(前記以外の産業)の三つに分類される。国の労働状況の調査(国勢調査)では、47 の都道府県別に第 1 次、第 2 次、第 3 次それぞれの産業ごとの就業者数が発表されている。ここでは都道府県別に、就業者数に対する各産業に就業する人数の割合を算出したものを、各産業の「就業者数割合」と呼ぶことにする。

- (1) 図 1 は、2015 年度における都道府県別の第 2 次産業の就業者数割合のヒストグラムである。なお、ヒストグラムの各階級の区間は、左側の数値を含み、右側の数値を含まない。

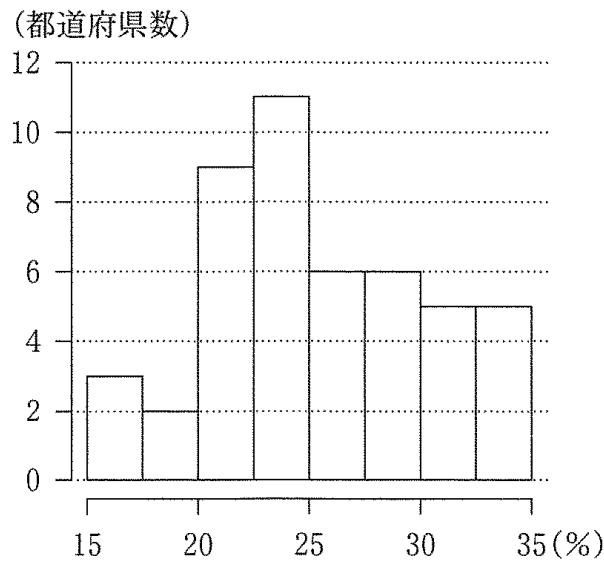


図 1 2015 年度における第 2 次産業の就業者数割合のヒストグラム

(出典：総務省の Web ページにより作成)

(数学 I 第 4 問は次ページに続く。)

図 1 のヒストグラムから次のことが読み取れる。

- 最頻値は階級 の階級値である。
- 中央値が含まれる階級は である。
- 第 1 四分位数が含まれる階級は である。
- 第 3 四分位数が含まれる階級は である。
- 最大値が含まれる階級は である。

~ の解答群(同じものを繰り返し選んでもよい。)

① 15.0 以上 17.5 未満	① 17.5 以上 20.0 未満
② 20.0 以上 22.5 未満	③ 22.5 以上 25.0 未満
④ 25.0 以上 27.5 未満	⑤ 27.5 以上 30.0 未満
⑥ 30.0 以上 32.5 未満	⑦ 32.5 以上 35.0 未満

(数学 I 第 4 問は次ページに続く。)

数学 I

- (2) 図 2 は、1975 年度から 2010 年度まで 5 年ごとの 8 個の年度(それぞれを時点という)における都道府県別の三つの産業の就業者数割合を箱ひげ図で表したものである。各時点の箱ひげ図は、それぞれ上から順に第 1 次産業、第 2 次産業、第 3 次産業のものである。

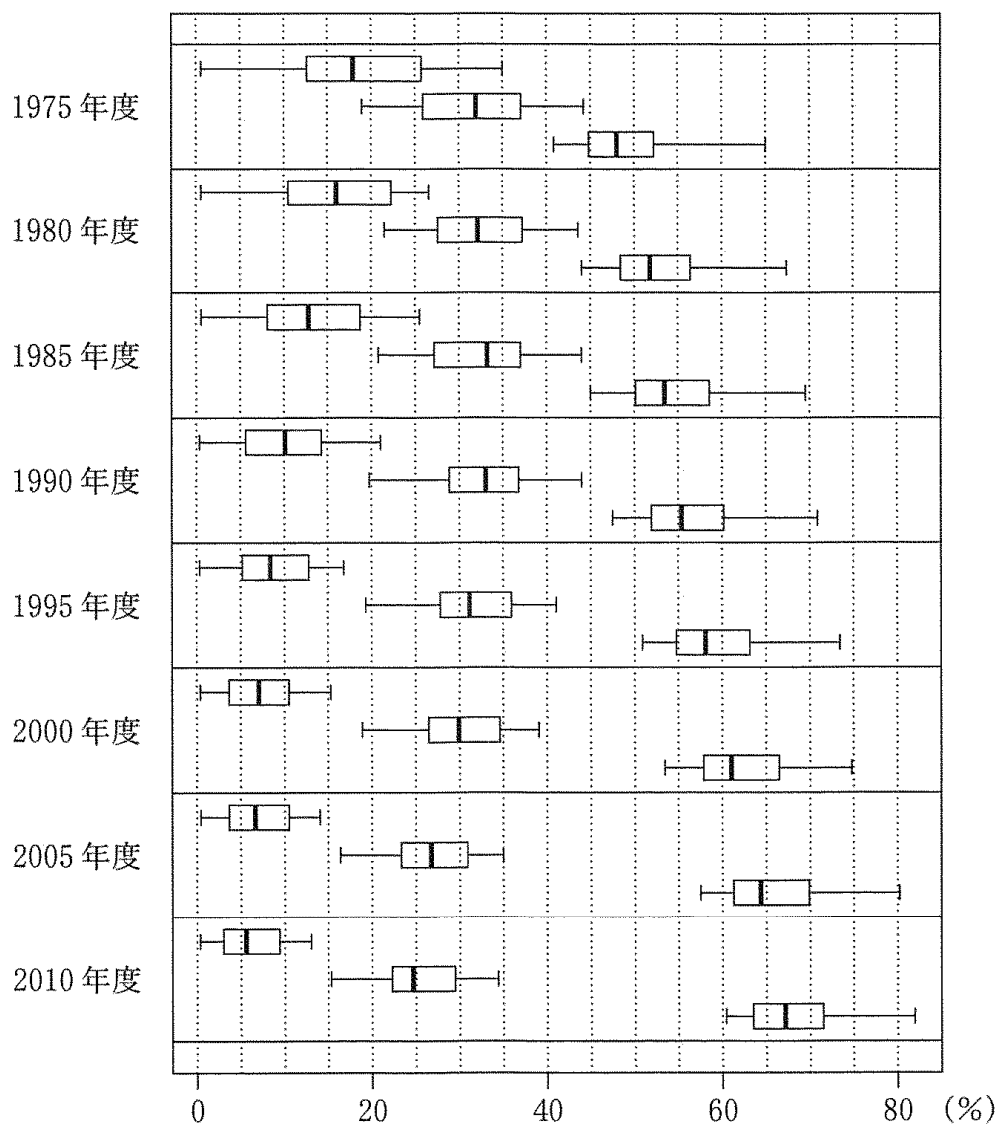


図 2 三つの産業の就業者数割合の箱ひげ図

(出典：総務省の Web ページにより作成)

(数学 I 第 4 問は次ページに続く。)

次の①～⑤のうち、図2から読み取れることとして正しくないものは

カ と キ である。

カ, キ の解答群(解答の順序は問わない。)

- ① 第1次産業の就業者数割合の四分位範囲は、2000年度までは、後の時点になるにしたがって減少している。
- ② 第1次産業の就業者数割合について、左側のひげの長さと同側のひげの長さを比較すると、どの時点においても左側の方が長い。
- ③ 第2次産業の就業者数割合の中央値は、1990年度以降、後の時点になるにしたがって減少している。
- ④ 第2次産業の就業者数割合の第1四分位数は、後の時点になるにしたがって減少している。
- ⑤ 第3次産業の就業者数割合の第3四分位数は、後の時点になるにしたがって増加している。
- ⑥ 第3次産業の就業者数割合の最小値は、後の時点になるにしたがって増加している。

(数学 I 第4問は次ページに続く。)

数学 I

(3) (2) で取り上げた 8 時点の中から 5 時点を取り出して考える。各時点における都道府県別の、第 1 次産業と第 3 次産業の就業者数割合のヒストグラムを一つのグラフにまとめてかいたものが、次ページの五つのグラフである。それぞれの右側の網掛けしたヒストグラムが第 3 次産業のものである。なお、ヒストグラムの各階級の区間は、左側の数値を含み、右側の数値を含まない。

- 1985 年度におけるグラフは

ク

 である。
- 1995 年度におけるグラフは

ケ

 である。

ク

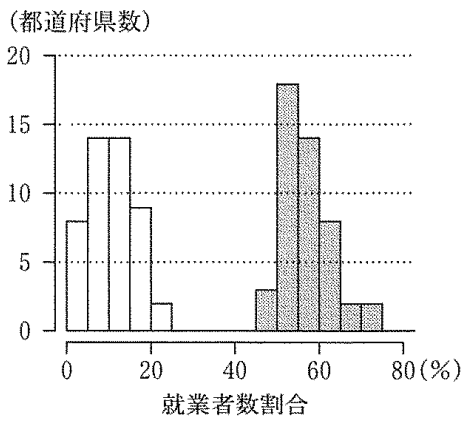
 ,

ケ

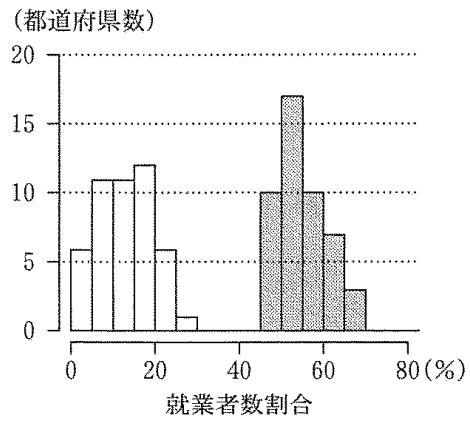
 については、最も適当なものを、次の①～④のうちから一つずつ選べ。ただし、同じものを繰り返し選んでもよい。

(数学 I 第 4 問は次ページに続く。)

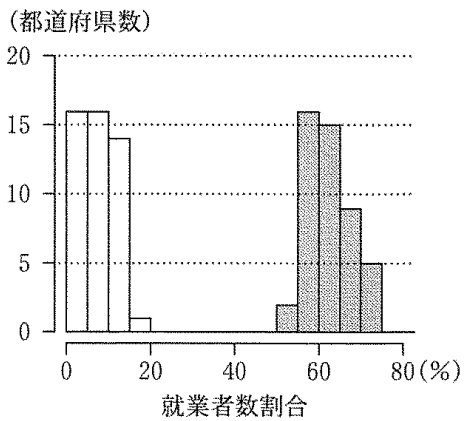
㉔



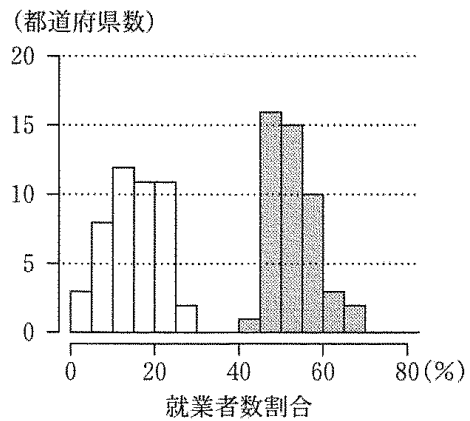
㉕



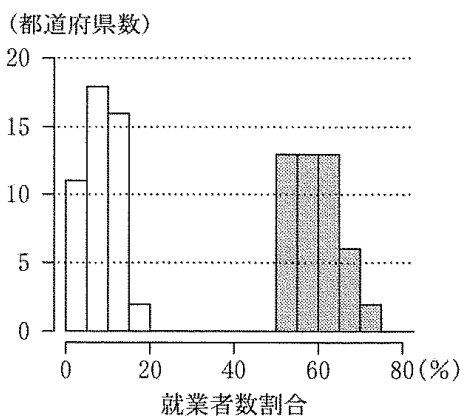
㉖



㉗



㉘



(出典：総務省の Web ページにより作成)

(数学 I 第 4 問は次ページに続く。)

数学 I

- (4) 三つの産業から二つずつを組み合わせて都道府県別の就業者数割合の散布図を作成した。図3の散布図群は、左から順に1975年度における第1次産業(横軸)と第2次産業(縦軸)の散布図、第2次産業(横軸)と第3次産業(縦軸)の散布図、および第3次産業(横軸)と第1次産業(縦軸)の散布図である。また、図4は同様に作成した2015年度の散布図群である。

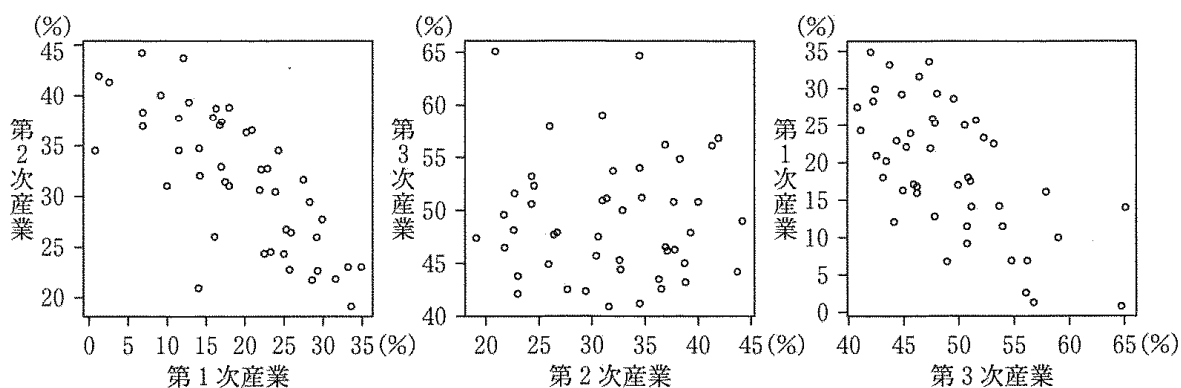


図3 1975年度の散布図群

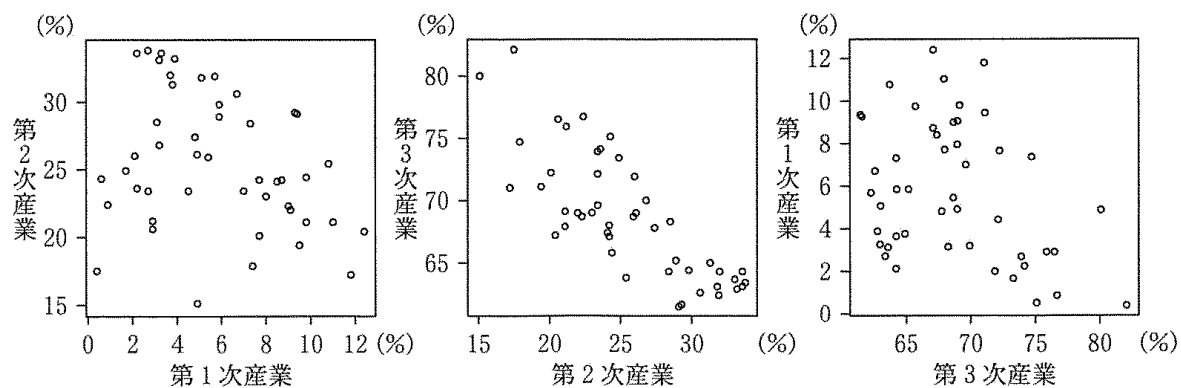


図4 2015年度の散布図群

(出典：図3，図4はともに総務省のWebページにより作成)

(数学 I 第4問は次ページに続く。)

数学 I

下の (I), (II), (III) は, 1975 年度を基準としたときの, 2015 年度の変化を記述したものである。ただし, ここで「相関が強くなった」とは, 相関係数の絶対値が大きくなったことを意味する。

- (I) 都道府県別の第 1 次産業の就業者数割合と第 2 次産業の就業者数割合の間の相関は強くなった。
- (II) 都道府県別の第 2 次産業の就業者数割合と第 3 次産業の就業者数割合の間の相関は強くなった。
- (III) 都道府県別の第 3 次産業の就業者数割合と第 1 次産業の就業者数割合の間の相関は強くなった。

(I), (II), (III) の正誤の組合せとして正しいものは コ である。

コ の解答群

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	
(I)	正	正	正	正	誤	誤	誤	誤
(II)	正	正	誤	誤	正	正	誤	誤
(III)	正	誤	正	誤	正	誤	正	誤

(数学 I 第 4 問は次ページに続く。)

数学 I

- (5) 各都道府県の就業者数の内訳として男女別の就業者数も発表されている。そこで、就業者数に対する男性・女性の就業者数の割合をそれぞれ「男性の就業者数割合」, 「女性の就業者数割合」と呼ぶことにし、これらを都道府県別に算出した。図5は、2015年度における都道府県別の、第1次産業の就業者数割合(横軸)と、男性の就業者数割合(縦軸)の散布図である。

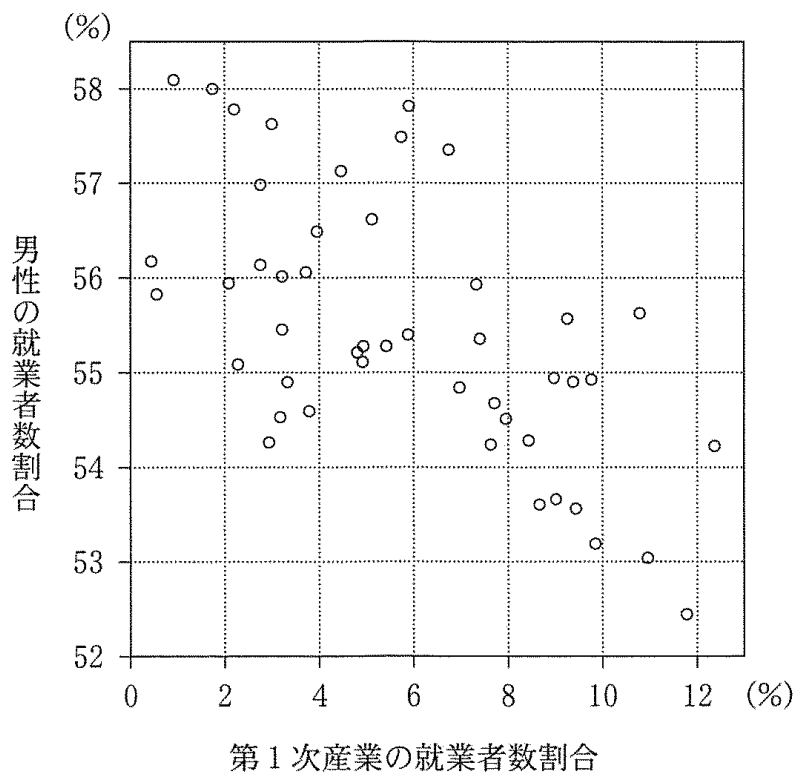


図5 都道府県別の、第1次産業の就業者数割合と、男性の就業者数割合の散布図

(出典：総務省の Web ページにより作成)

(数学 I 第4問は次ページに続く。)

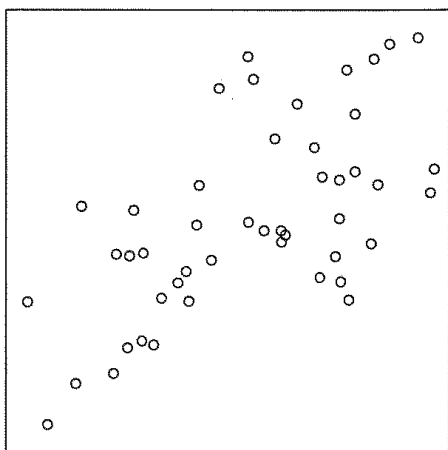
数学 I

各都道府県の、男性の就業者数と女性の就業者数を合計すると就業者数の全体となることに注意すると、2015 年度における都道府県別の、第 1 次産業の就業者数割合(横軸)と、女性の就業者数割合(縦軸)の散布図は **サ** である。

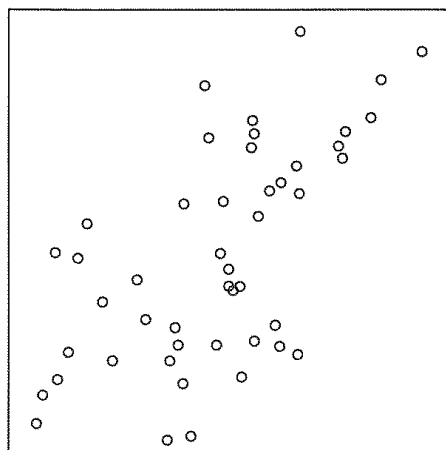
サ については、最も適当なものを、下の①～③のうちから一つ選べ。

なお、設問の都合で各散布図の横軸と縦軸の目盛りは省略しているが、横軸は右方向、縦軸は上方向がそれぞれ正の方向である。

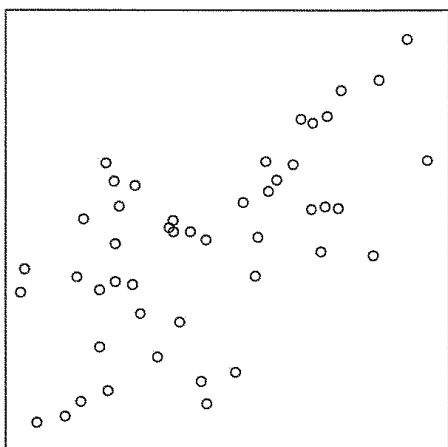
①



②



③



④

